

入試・教育の
新たな時代へ

岡山大学

岡山大学は国立大学では初めて、2012年度入試から一部学部国際バカロレア入試（IB）を導入し、2015年度入試から全学部学科で実施している。先進的にIB入試を導入した狙いと、現状の成果について解説する。

バカロレア入試の全学拡大で
学生の多様化、学内の活性化を推進IB入試導入で
学生の多様化を期待

IB入試を多面的・総合的な入試の一つとして、導入する大学が増えている。

岡山大学は2011年に森田潔学長が就任して以降、学生受け入れの国際化の検討を進め、「国際戦略ビジョン21」において、教職員の海外派遣、日本人学生の海外留学の拡大、留学生の受け入れ拡大等の数値目標を掲げた。同時に、2012年度から国立大学では初のIB入試を理工系学部からスタート。2013年度から秋入学試験にも導入し、2015年度春入試から全学部で拡大した。

IB入試を導入した最大の狙いは、学生の多様化にある。特に、物事を多角的に見て課題や問題点を明らかにし、自ら調べ考え、自分の判断で行動できる力を重視する。

IBは国際バカロレア機構（IBO、本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラムである。年齢に応じて3つのプログラムに分かれるが、とりわけ16～19歳の2年間を対象とするディプロマ・プログラム（DP）を修めれば、多くの国で大学入学資格を得られる。これまで日本国内のIB認定校はインターナショナルスクールを含め、

二十数校だったが、2012年、文科省は2018年までに200校程度に拡大することを打ち出した。現在（2015年6月時点）、認定校は34校にとどまっているが、日本語で実施できる「日本語DP」も2015年からスタートし、認定校は今後、増加する見込みだ。

IBプログラムの学習者像は、日本の大学に現在求められている人材育成像とも合致しており、知識偏重の大学入試や講義型の多い大学教育にも好影響を与えるものと期待されている。

訪問調査でIB修了者の
受け入れの意義を実感

アドミッションセンター長で入試改革担当副学長の田原誠教授は「以前から、IBプログラムに注目していた」と話す。2009年、田原教授が外国語教育センターの副センター長を務めていた頃、9月入学を検討することになった。IB入学者であれば、英語とIBハイヤーレベルの単位を卒業単位として認定することで、9月入学後3年半での卒業が想定されたため、本格的にIB生の進学状況について調査を始めた。

IB入試を導入するにあたり課題となったのが、英語の授業のみで学位が

取得できるカリキュラム体制がなかった点だ。そのため、日本語の授業も理解できる生徒を獲得する必要があった。IBで日本語を母語とする生徒が対象の科目「日本語A」の履修状況や進路に関する調査を行い、ニーズの把握に努めた。

まずはシンガポールとタイのIB校を訪問した。この2か国に限らず、「日本語A」を履修する生徒が帰国する場合、多くは帰国生徒入試を受験する。理系学部志願者には筆記試験に理科等の科目を課す大学もあり、そのことで諦める生徒が多いという。そのため、書類のみの選考を検討する岡山大学のIB入試に対して好意的な反応が多かった。

続いて欧州のIB校を訪問。この時、理・農・工学部の教育担当副学長にも同行してもらった。各学部のキーパーソンにIBプログラムの優れていること、修了生を受け入れる意義を実感してもらうことで、反対する声は最小限にとどまった。

IB入学生の多角的視点が
授業を活性化

2011年8月、理系のうち理・工・農・

医学部（保健学科）と、各学生が学部・学科の枠に捉われずに履修プログラムを作成できるマッチングプログラムコース（MP）で入試を実施（2012年春入学）、1人がMPに入学した。

2013年度の秋入試も含め、2015年春までに計22人が志願し、14人が合格。ただし、実際の入学者は7人（うちMP4人）にとどまっている。IB資格が世界に通用するということは、世界中の大学と優秀な学生を取り合うことでもある。海外の日本人駐在員の子どもにターゲットを絞っても、その多くは関東や名古屋圏の出身者であり、「現状、岡山というのは相当なハンディ」（田原教授）であることは否めない。

少人数ではあっても、IB入学生がグループワークやディスカッションで日本人学生にはない多角的な視点で意見を述べ、授業が活性化するなど、そのプラス効果は学内で徐々に知られるようになった。

多面的入試の推進もあり、2015年度からは全学部・コースでのIB入試導入が決定。教育学部、医学部と歯学部は、卒業後、コミュニケーション能力が特に求められる仕事に就く者が多いことを考慮して、他の特別選抜と同様に面接を課すほかは、書類審査（成績評価証明書、自己推薦書、評価書）のみ。付帯条件として「日本語A」の成績がハイヤーレベルで4以上であることに加え、学部ごとに指定科目とその成績基準を設けている。募集人員は、医学部医学科が3人としているほかは、いずれも若干名である。

留学生との橋渡しや
授業でのリード役を期待

IB入試による入学者は、2013年度に開設した副専攻「グローバル人材

図表 岡山大学のIB入試の概要

書類審査のみ	文学部、法学部、経済学部、理学部、薬学部、工学部、環境理工学部、農学部、マッチングプログラムコース
書類審査＋面接	教育学部、医学部（医学科、保健学科）、歯学部

※書類：「成績評価証明書」「自己推薦書」「評価書」
※付帯条件：「日本語A」の成績がハイヤーレベル4以上、学部単位ごとに指定科目あり
※定員：医学部医学科3人、他は若干名

育成特別コース」を優先的に履修できる。コースは全32単位、コース限定の1、2年次の英語力養成プログラム「SPAcE」や教養教育科目「グローバル・コア1」を履修し、海外の協定校に短・長期留学。帰国後は英語による専門教育「グローバル・コア2」も履修して、グローバルリーダーシップを育む。IB入学生以外は、全学部から希望者を募り、英語力の確認、面接、書類審査により100人程度を選抜している。

IB入学生に何よりも期待するのは、他の日本人学生に与える影響だ。2016年度から全学的に60分授業、クォーター制を導入する。これをきっかけに対話型授業をめざし、小グループによるワークやディスカッションなどの手法を取り入れた教育改善を一気に進める。大学側にとって、ディスカッションなどの基礎が身に付いているIB入学生に対する期待は大きい。津島キャンパス一般教育棟別館に開設した外国語によるコミュニケーションスペースL-caféでも、IB入学生が留学生と日本人学生の橋渡し役を担っている。

環境生命科学が専門の田原教授は2014年度、DPカリキュラムの「コア」であるTOK（Theory of Knowledge:

知の理論）に類するセミナーを、学内の希望者を対象に試験的に開講した。留学生と日本人学生十数人ずつを集めたCBI（Content-Based Instruction、内容重視の教育法）*を実施し、「岡山大学を真にグローバルにするには」というテーマの提案書を学長に提出。ここでもIB入学生が活躍した。

2014年には「PRIMEプログラム」が文科省のスーパーグローバル大学の（タイプB：グローバル化牽引型）に採択されるなど、競争的資金を活用したプログラムを続々と実施している。IB利用入試の活性化に関する取り組みも、同年度の大学教育再生加速プログラム（テーマⅢ：入試改革）に選定された。

岡山大学は多面的・総合的な入試を進め、2018年度までに全入学生定員の5%をIB入試入学者とすることをめざしている。ただ、単にIB入学者を増やしたいというより、多様な学生を受け入れて切磋琢磨させることが狙いである。とりわけ期待するのが、知識には長けている日本人学生のリード役だ。田原教授は「IB入学生に『来てよかった』と思ってもらえる大学にしたい」と、大学改革への意気込みを語った。

* CBIは、内容の学びと統合された言語教育で、田原教授の授業では社会問題を扱うことが多い。